

第9回 西アジア分科会議事録

日時：2009年1月7日（水）15:00 - 17:00

場所：東京文化財研究所 第一会議室

出席者：前田耕作、上岡弘二、西秋良宏（以上、西アジア分科会委員）、赤澤威、古市徹雄（以上、報告者）、田中健太郎（文化庁）、安藤義雄、守山弘子、橋本奈津子（以上、外務省）、清水真一、山内和也（以上、東京文化財研究所）、青木繁夫、豊島久乃、田代亜紀子、小角由子（以上、文化遺産国際協力コンソーシアム）

1. ナトゥーフ期 デデリエ洞窟（シリア）住居跡保存計画案

赤澤威（高知工科大学）

報告：現在発掘中であるシリアのトルコ国境近くにあるデデリエ洞窟における住居保存計画をご報告する。デデリエ洞窟は、1987年に発見され、1989年から毎年調査を行っている。今年度の夏にも調査を行う予定である。このデデリエ洞窟は、1993年にネアンデルタール人の全身骨格が見つかったことを契機に、現在の中東を代表する遺跡として非常に有名になった洞窟である。2003年に、発見されたネアンデルタール人骨に関する報告書も刊行されている。しかし、本日の主たる報告は、ネアンデルタール人が洞窟を去った後、旧石器時代の最後にこの洞窟に住み着いた、ナトゥーフ人による石造建造物の保存に関するものである。

まず、最初に洞窟周辺の人類史上の位置づけについて説明する。洞窟は、中東の西端を南北約千キロにわたって走る細長い盆地にある。ここはアフリカの大地で誕生した初期人類が、ユーラシア各地に移住していく際に、最初に足を踏み入れた場所であり、私は「最古の移住回廊」と呼んでいる。このような場所であることから、早くから欧米などの研究者によって、進化の問題、あるいは旧石器文化の時代的変遷などを辿るうえで、最適なフィールドとして調査されてきた。

最初に4つの遺跡を取り上げたい。1つ目は、イスラエルのカルデロ山遺跡群、2つ目は、シリアのアブドゥル遺跡群である。1930年代に発掘をされた遺跡群であるが、詳細な研究の結果、中東を中心とする西アジアの先史文化、さらにそれを担った人の進化というものを検討する際の基本的な「台本」となるものが、この2つの遺跡群を使って書かれてきた。しかし70年以上前の発掘であるので、この2つの遺跡を使った様々な「台本」というものは、ある意味では修正を迫られているものもある。もうひとつはイラクのシャリダール洞窟であり、ここは、多くのネアンデルタール人が発見された場所である。このネアンデルタール人が、本当に死者を埋葬したのだろうか、我々ホモサピエンスと同じような知的な生き物、すなわち「人」であったのだろうかという報告は、世界に驚きをもたらした。しかし、最近ではこの「台本」も、再検討が迫られている。

また最後に、日本隊が発掘したマウントという洞窟があるが、ここでは素晴らしいネアンデルタールの全身骨格が見つかり、このネアンデルタール人は、人類学の分野で非常に脚光を浴びている。

ネアンデルタールは、なぜ滅んだのか。つまり、ネアンデルタールとアフリカから移り住んできた我々現代人の祖先であるホモサピエンスとの間に何が合ったのか。死海地溝帯に分布する遺跡によってかかれた仮説は、最近の研究によって問題点が指摘されたり、課題としてとり上げられたりしている。ネアンデルタールに限らず、西アジア死海地溝帯を中心とした西アジア一帯で、持ちあがっている様々な問題を再検証するために必要な新しい施策として、非常に現在脚光を浴びているのが、本日も報告するデデリエ洞窟である。

このデデリエ洞窟を代表する遺跡の一つとして注目を浴びている理由は、ネアンデルタール人の人骨が相次いで発見されているからである。この遺跡だけで、最小個体数7の人骨が出土しているが、実際は、7個体以上あると考えている。これだけ大量のネアンデルタール人骨が出土した事例は、中東ではない。ある意味では、近年最大の発見といえる。さらに、遺跡ではネアンデルタール人が出土した後期ムステリアンの層から、それに先行する旧石器文化が整然と堆積している状況がわかった。後期ムステリアンの下からは中期ムステリアン、その下からは初期ムステリアン、さらにその下からは、全く新しい石器文化が整然と堆積している状況がみえてきた。これが見つかった場所は、洞窟の入口部分である。

発掘により、洞窟、または洞窟周辺において、ネアンデルタールとホモサピエンスの交代劇が具体的に検証できるということがわかってきた。農耕民に先行する最後の狩猟民であるナトフィアンの遺構がでてきたのである。後期ムステリアンの堆積を切り込むように構築されている石造の建造物といったものが、堆積物の最上部から出土している。洞窟の保存が良く、形状、構造、柱穴部分、墓、入口部分などが詳細に復元できる。また、住居を中心とするこの洞窟から、ナトフィアンを検証し得る具体的な証拠も大量に出土している。これだけ良好な状態のナトフィアンの洞窟遺跡を発見できたのは初めてであり、おそらくこのままの状態にしておくと壁が崩壊して消えていく。ナトフィアンの住居を、後続の研究に資すると共に、素晴らしい成果を残した日本隊を中心とする調査団の仕事を検証するためには、保存する必要がある。

そこで、千葉工業大学の古市達雄教授に、保存方法の検討をお願いした。古市氏には、一つは堆積部分を含めた石造建造物を樹脂で固定するという案、発掘部分を硬化ガラスでカバーする、という案を提示していただいた。洞窟をいわゆるフィールドミュージアムのように考えるものである。具体的には、堆積物の固定にかかる経費が約250万円、硬化ガラスで発掘部分をカバーする経費が約1700万円と積算されている。

本日は、保存計画案についてご意見いただきたいと思っている。この計画案は、古市氏が写真と簡単な図面を基に机上で検討してくださったものである。従って、実施計画

案は、現地調査を行ったうえで決定する必要がある。この保存計画案のためにどのような専門家が妥当かご相談したい。また、このような意義ある発掘資料をどのように保存していけば良いのか、ということは最終的な課題である。

補足：西秋良宏（東京大学）

この遺構は、多くの文化層も出土しており、第一級の遺跡であるといえる。日本なら、当然史跡に指定されるものである。加えて、ナトフィアンの遺跡が発見されたということ、中東での初めての発見、かつ保存状態が良いこと、そして火事の痕跡がみとめられる全く初めて遺跡である。このような点から、この遺跡は十分学術的な意義あるものである。そしてここは、避暑地に位置しているので、保存して一般の方に楽しんでもらえるような可能性がある。

・シリア政府はこの遺跡保存に関してどのような考えをもっているのか。シリア政府が自ら行うということはあるのか。

→ おそらくシリア政府は、何もしないと思う。調査団の責任で保存するということに反対はないが、自ら積極的に参加して保存することはしないだろう。このような形で外国隊が保存する遺跡は幾つかある。

・古市氏の案に関してだが、アプローチを作る必要があると思うが、経費はどうなるのか。

→ アプローチをどのように作るかという考え方に依ると思う。

・硬化ガラスをこのように用いることは、日本でも幾つか例がある。日本の場合は、レプリカを作ってレプリカの上をガラス張りにするというものが多い。実際の遺構を保存して展示となると、土壌水分の蒸発などが考えられる。すると、ガラス表面に結露がでるなど、様々な問題をクリアしないとならない。まず、基礎的な調査をする必要があるだろう。

・もし保存するとなると、約 2000 万円の資金が必要であるとされているが、これだけの資金について、コンソーシアムから資金源などの提案はないだろうか。

（外務省）そのような規模だと開発援助となるだろう。ユネスコの信託基金で遺跡の保存に協力するというものがあるが、これはユネスコを通じた協力なので、様々な制約がある。現在信託基金で行っているカンボジアのアンコール遺跡とバーミヤン遺跡は、カンボジアの 1990 年代復興支援が始まって以降からの流れ、またバーミヤンも同じく、復興支援からの流れで行っているという背景がある。

(文化庁) 文化庁は、初動的な経費というものはある。しかし、現在行っている拠点交流事業に関しても、各国政府が保護していこうと行動を既におこなっているものを対象としているので、デデリエのような事例では難しい。

・この遺跡は世界的な評価を受けるものである。実際保存をしていくにあたっては、予備調査が必要であろうという意見があった。この予備調査に対する資金に関しては、どのようなことが考えられるかご意見いただきたい。コンソーシアムでは、今後どのように扱えるか。

・まず、露出展示に相応しい現地の気候環境あるいは土壌かどうかという確認作業が必要であると思うが、その点は調査済みだろうか。

→ 確かに、そのような検討が必要であることは報告を受けている。石の種類を調べること、湿度の問題など、現地調査でのデータを基に最終的な判断が必要である。

・どのようなスケジュールを考えているのか。

→ 緊急を要する問題だと思う。この洞窟の本格的な発掘は、今年の夏を最後と考えている。昨シーズンも、大きなビニールシートをかぶせているが、何らかの措置を講じないとおそらく数年で崩れ落ちてしまうのではないかと考えている。

・もし保存計画が実施できるにしても、様々な基礎調査を含め、時間的には最短で3年以上はかかると思う。その間に遺跡は壊れてしまうので、応急的な措置として調査が終わり次第、埋め戻しをすることが最初の段階として必要と思う。乾燥し、おそらく石の間にある土が崩れていくので、まずは埋め戻しをするのが良いと思う。

・パーミヤーン遺跡でも発掘が行われており、伽藍が出てきているが、その都度埋め戻しをしている。保存についてはまだ議論が進まないことが理由である。この点は難しい問題だ。

・保存計画案をつくって頂いたことで、容易に保存方法を理解することができたが、この方法が的確かどうかということを検討しなければいけない。パーミヤーンなどでも、遺構を保存をする場合、やはり下準備が必要である。そのためには今問題になっていた環境などに関しては、通年のデータが必要となる。基礎データの収集、同時にいろいろな設計を始めると1年以上は経過してしまう。このまま置かれる場合は、小動物・虫の問題もあり、人も洞窟に入ってきていると思う。そのようなことを考えると、若干リスクはあっても埋め戻すことはやむを得ないと思う。設計としては良いのかもしれないが、実際このガラスが土地に合うのかどうかという問題もある。また、下の空間を開けておくと小動物が入る

可能性がある。そして最終的にはシリア政府が管理する形にしなければ、いくら日本が頑張ったとしても今後の管理の問題がでてくる。シリア側のシステムや法制度をかけあつて、シリア側にも管理をさせながら基礎的なデータを拾い、なおかつ経済的にリーズナブルに設計を行うということを考えると、やはりすぐに進めることはできないだろう。バミヤーンや、他の地域でも、保存処置が始まるまでにこんなに時間がかかるのか、と認識したのが正直なところである。やはり1年から2年は基礎的な部分を行うことが必要だろう。それが失敗を防ぐことにもなる。まず、協力者を探すということが必要かと思う。

・保存のための基礎的な調査を行う場合、どのような専門家でチームをつくれればよいのか。

・最低2人以上の専門家が必要かと思う。遺跡の保存を専門に行っている人もいる。土壌環境、石の材質、また、どの程度劣化しているのかといったことを調査する必要がある。その他、樹脂も多様な種類があるので、どのタイプが合うかということを確認しなければならない。樹脂は必ずメンテナンスが必要となってくるので、そういったことを含めて調査していかなければならない。加えて、水分蒸発の抑制をどうするかといったことを検討する必要がある。水分の蒸発が多ければ、遺構をガラスで覆った場合、水分蒸発の逃げ場がないので、逃げ場をつくる仕掛けが必要となる。また、ガラスも単に強化ガラス1枚ではなく、断熱性を考慮したタイプのものにするなど検討しなければいけない。保存処理したことでかえって状態が悪化する場合があるので、慎重にやる必要がある。

・科研費などの助成により、日本人専門家による発掘で世界的に認められる素晴らしい研究成果がでていますが、保存についての資金はなかなか難しいという点もある。赤澤先生が今回コンソーシアムに問題提起してくださったことは意味がある。どのような手続きをとり、どのくらいの期間で遺跡保存の計画を実行できるような方向にもっていけるか、次の段階で探らなければならない。今回、結論はでないと思う。しかし、ここでいくつかの保存上の問題定義を頂いたので、コンソーシアムの西アジア分科会としては、提案を受けとめたところから出発するよりほかはないかと思う。

・本事業が、これまでにどのような枠組みのなかで行われてきたのか、国がナショナル・プロジェクトとして関わっていくべきか、もしくは民間からの資金で行うべきかなど、コンソーシアム自体は、現在官民あわせて議論されている場であるので、両方の可能性を考えて提案いただければと思う。

→ 予算的な背景を説明する。これは、文部科学省の海外学術調査研究費を軸にして進めてきたプロジェクトである。もちろんその間、民間の財団の援助も加わっているが、メインはいわゆる科研費で行っている。ナショナル・プロジェクトということでやる価値についてだが、私の意見を述べると日本隊が海外で行っているプロジェクトを検証するよりは、

国際的に宣伝することが非常に重要だと考えている。日本は、おそらく世界でも最も税金を使って海外プロジェクトを行っている国ではないかと思う。しかし、数多くの海外調査団が調査を手掛けているなかで、研究のみで終わらせているところはない。フランスなど一部の国では、自分達が行ったプロジェクトは、遺跡の保存も含めていろいろな形できちんと残している。これに対し、日本は予算の面においても非常に不利である。そのような保存に係る経費は、文科省の科研費では支出できない。これだけ多くの海外調査団が世界各地に出て、様々な分野で研究成果を蓄積しているのに、その国にほとんど残らないというのは非常に残念なことである。昔は、海外調査に行った場合、発掘品は持ち帰り、研究機関や博物館に資料を蓄積することができたが、現在はできなくなっている。さらに、現地でも何も残せないということになると、莫大な予算を投じて行っている海外調査に対する国際的な評価をえる手立てがない。私は、この点は非常に重要だと考えている。遺跡の調査に限らないが、海外調査で得た成果を現地に残して、日本隊もしくは日本研究者が挙げた成果を、現地にかたちとして残さなければ大変もったいない。

・これは現地で活動する者は誰も痛感していたことで、科学研究費も実際の現状に合わせて変わっていかねばならないのだが、残念ながらそのようにはなっていない。学術的には成果を挙げているのに、重要な成果を示す方法がない状況において、コンソーシアムを設立したということはそれなりに意味がある。この組織が頑張る以外にない。そのような意味では、今回の事例は一つの大きな問題定義として受けとめ、今後さらに議論を深めていければと思っている。西秋先生も同様の経験があると思うが、文化遺産に対する発掘部門の貢献についてご意見いただきたい。

西秋良宏（東京大学）：私共のプロジェクトは非常に小さなものだが、資金はかかる。そこで現地の日本大使館にかけ合ったところ、いろいろ外務省経由でやってくださったが、結局実現できなかった。デデリエ洞窟にかかる費用は、国際支援としては少ない方だと思う。しかし、日本の海外での評価を高めることができることは確かなので、コストパフォーマンスは非常に良い話である。しかもこの洞窟では、20年以上、日本人が仕事をしていることを現地の人は皆知っている。その成果が、これから先40年は使える投資になるわけである。

・では、この問題はいずれ運営委員会で報告をして、そのレベルによって判断を仰ぐという機会をもちたいと思う。

2. アジャンター石窟壁画保存修復事業

山内和也（東京文化財研究所）

報告：アジャンター石窟壁画保存修復事業について報告する。2008年11月21日に、インド政府を代表とするインド考古局と、日本の独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所間で合意書が結ばれた。これは、アジャンター壁画修復保存のための調査研究活動を遂行するために、親密な相互の関係を築くことを望み、アジャンターにおいて双方の専門的技術の訓練と能力育成を含み、保存修復のための技術および材料に関する知識、専門的技術経験をインドと日本との間で交換することを目的とする。本プロジェクトは、文化庁から委託されている「文化遺産国際協力拠点交流事業」の枠組みの中で行っている。アジャンターの石窟壁画の保存修復が大きな目標であるが、その前段階となる調査研究を核としている。この合意書に基づき、第1回のミッションは、2009年2月中旬から3月に派遣されることが予定されている。

・アジャンター石窟は、日本の専門家たちが長い間関わってきたが、石窟の保存計画について具体的にふみ込んで関わるのは今回が初めての事例だと思う。基本的な石窟の実測図も、まだほとんどないということである。これだけ有名なアジャンターであっても、正確な実測図がまだつくられていないことを発見し驚いている。そのような困難が、プロセスのなかではあると思うが、ある意味では日本の技術も問われることなので、立派な仕事をするように努力をしていただきたい。

3. イエメンの洪水による文化遺産被害について

（外務省）イエメン東南部で洪水が発生し、様々な被害が発生している。この地域では、世界遺産になっているシバームが国際的に有名だが、その遺跡も大きな被害を受けているということで、ユネスコも立ちあがる気配をみせている。国際的な緊急支援というものが動き出すということであれば、日本もそこで何かできるか情報を集めたい。日干し煉瓦の建築なので、なかなか日本の協力と現地側の要請が一致するのか不明だが、その辺の情報収集もコンソーシアムのほうにお願いをしているところである。現地の大使館も懸命にいろいろな人と会って情報収集をしているが、イエメンの国内自体がまだ混乱を極めており、まず住居の手配などの人道支援を優先で動いているので、なかなか遺跡被災状況を聞こうとしても難しい状況にある。引き続き情報収集をしていきたいと思っているので、コンソーシアムには是非ご協力願いたい。

・緊急性を考慮し、コンソーシアムでは、12月21日に専門家を集めて情報交換会というよ

うなものをさせていただいた。外務省からは、イエメン文化省によるシバーム被害報告、洪水被害に対する各国に支援状況、そしてシバームにあるドイツ技術協力公社(GTZ) 駐在事務所の担当者からの情報をいただいた。また、専門家として岡田保良先生(国士舘大学)、山田幸正先生(首都大学)、深見奈緒子先生(東京大学)、建築家の山田利行先生に参加いただき意見をもらった。文化庁からは田中補佐にご出席いただいている。加えて、慶応大学の新井和広先生には、洪水被害が大きかったハドラマウト地方についてご報告いただいた。会議では、岡田保良先生から、シバームについてはドイツのGTZ とオランダのプリンス・クラウス・ファン・ド、そしてユネスコがワークショップを開催する予定であるという情報が入っていることに対して、これに日本も参加すべきではないかという意見があった。また、世界遺産ということでシバームが注目されているが、ハドラマウト地方全体をとらえ、どのような文化遺産があって、どのような支援が必要とされているかに対して、改めて考える必要があるのではないかという意見がでた。

コンソーシアムでは、相手国調査という枠組みがあり、これは協力相手国における文化遺産国際協力効果や、日本以外の国が行っている国際協力について調査研究をおこなうものである。この枠組みにおいて、今回の洪水発生による文化遺産被災状況調査を実施し、専門家の先生方を2名もしくは3名派遣することも検討可能である。これに対し、西アジア分科会の先生方にご意見をいただきたい。

- ・長く関わってきた先生にお願いした方が有効であろう。

- ・聞いたところによると、建物に被害はでていますが、問題はそこに住む人がいなくなったことで維持できないとのことである。おそらく開発、経済、社会学の先生もチームに入っていた方が、建物を将来的に守るって意味では必要と思う。

- ・つまり、都市計画、建築、イエメン地域研究、開発・開発経済の専門家というかたちになるか。

- ・そのような方向で良いと思う。なるべく学際的なチーム構成が良い。ある分野の専門家だけで集まると、必ずしも持続可能な保存の方向には踏みだせない問題にぶつかる。

- ・その他、ご意見などありましたら事務局までいただきたい。

- ・考えてみると、現場での意見を重視していく必要があると思う。日本の研究者たちが拓いている現場の情勢のようなものは、常に意識していく必要があると思う。何事にも代えがたい蓄積を有効に活用するべきであろう。

では、第 9 回西アジア分科会を閉会したい。赤澤先生の提案を真摯に受けとめたいと思っている。今ありがとうございました。

以上